

平成 17 年度
前 期

日本語論述

13 : 30～15 : 30

解答上の注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題紙を開いてはならない。
- 2 問題紙は、この紙を含めて 5 枚ある。
- 3 解答用紙 (25 字×40 行=1000 字) は、2 枚ある。
- 4 解答用紙は、2 枚とも必ず提出すること。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の指定された個所に必ず記入すること。
- 6 選択した問題番号は、すべての解答用紙の指定された個所に必ず記入すること。
- 7 解答は、すべて解答用紙の指定された欄に記入すること。
- 8 下書き用紙は別途配布されるが、問題紙の余白を下書きに使用してもさしつかえない。
- 9 問題紙および下書き用紙は持ち帰ること。

以下の問題1～4のうちから1題を選択し、1600字～2000字の日本語（横書き）で解答しなさい。

1

次の文章を読んで、下線部の「落とし穴」とはどのようなものであると考えられるかについて、たとえば、メディア報道の断片性・偏在性、報道におけるニュース価値とはいかなるものか、といった観点から論じなさい。

要するに、われわれ現代人は、ある意味では相矛盾した、複数の現実にもまれて生きているのだ。……つまり現代人は、多様な現実によっていわば引き裂かれてしまうのである。

さらに困ったことがある。専門化が進み知識が増えるにしたがって、現実はずますます複雑怪奇になり、その大半は見えなくなってしまうのだ。普段われわれは、経済や法律の膨大な知識体系のことなど全く意識せずに暮らしている。だが、それらは潜在化しているだけで、たとえば交通事故にあった時など、思いがけない機会にヌツと顔を出してくる。

こうして不安におののくわれわれに、まとまりのある「現実のイメージ（像）」を与えるのがマスメディアに他ならない。それは潜在している多様な現実取材して、一種の頭在的な「世界絵図」を描きだす。われわれはテレビ番組や新聞記事を通じて、「現実はこうなっている」と信じこみ、落ち着きを取り戻すことができる。そこには、経済、学問、法律、愛情関係など、各システムの活動に関するイメージが手際よく編集され、幕の内弁当のようにコンパクトに並べられているのだ。

このようにマスメディアは単に何かを報じているのではなく、現代人の世界観を支えており、それゆえ現代に不可欠のものなのだ。だが、そこに落とし穴もまた、ひそんでいるのではないだろうか。

（2004年5月13日朝日新聞夕刊、西垣通『現実と情報学』より）

文化（副次文化も含む）を仮に、「ある特定の集団によって獲得、蓄積、共有されている知識、信仰、道徳、法、生活様式その他の生活習慣の集大成」と定義する。また、コミュニケーションを仮に、「人間同士が言語や非言語を通して、知、情、意の側面を伝達しあう相互作用を総称するもの」と定義する（岡部、1987 『異文化コミュニケーション』第二章「文化とコミュニケーション」）。これらの定義を基礎に、文化とコミュニケーションとの関係・その問題点を論じなさい。その際、次に挙げるコミュニケーションの基本原則（グディカンスト & キム、1992 *Communicating with Strangers*）を適宜参考とし、議論を組み立てること。

- (1) コミュニケーションはメッセージの記号化と記号解釈を伴う——メッセージの送り手は、自分の考えや感情を他人に意味解釈可能な形で記号にして受け手に送り、受け手は受け取ったメッセージの意味を解釈する。記号は言葉、しぐさ、信号など人間が何かを伝えるために意図的に作り出したものである。
- (2) コミュニケーションは意識及び無意識の両レベルで成立する——人が自分のコミュニケーション行動を意識する程度は、状況によって異なる。また、送り手の意図の有無に関わらず、受け手がその行動を解釈して意味付けをする限り何かは伝わり、そこにコミュニケーションが成立する。
- (3) 人はコミュニケーションの結果や効果を予測して行動する——メッセージの送り手がコミュニケーション行動を選択する際、受け手がどう反応するかという、その行動により予測される結果や効果が判断基準となる。
- (4) コミュニケーションには内容面と関係面の二面がある——コミュニケーションには、メッセージの内容（何を伝えるか）を示す面と、送り手と受け手を結ぶ関係を示す面（どのように伝わるか）と、の二つがある。内容を示す面は言葉により記号化されるが、関係を示す面は非言語的・無意識的にも記号化され、解釈されることが多い。

3

われわれが自らを一国民として意識するためには、何らかの文化的アイデンティティーを自覚することが不可欠である。しかし、現代のグローバル化の中で文化が一定程度平準化することも不可避である。このような状況の下で、「文化」とはそもそも何を意味し、世界的な文化の均質化と一国的な文化の特殊化との生産的な均衡はどのように図られるべきかについて、あなたの見解を述べなさい。その際、次に掲げる二つのポイントを参考にして論じなさい。

- (1) 自らが属する国家の文化的アイデンティティーの指標を挙げること。
- (2) 現代のグローバル化にとって特徴的な事例・事態を挙げて、それに対する見解・評価を述べること。

「学ぶ英語／教える英語」と「使う英語」の区別をめぐる以下の議論について、あなたの意見を述べなさい。その際、「英語」を日本語に、「English」を Japanese にそれぞれ置き換えて論じてもよい。

だが、「英語を学ぶ」と「英語を使う」という際の二つの「英語」は同じ対象を指すのだろうか？ こういう問いかけをすると、多くの人は怪訝な顔をする。それは質問の意図がはっきり掴めないからであろうが、しかし、その答えは明らかに「否」である。端的に言えば、学ぶ英語は《English》であるのに対して、使う英語はその使用者に内属した英語、すなわち《my English》である。誰も「英語一般」を使用することは、原理的にできない。所有代名詞を欠いた《English》は「学習目標としての英語」ではあっても、「今・ここで使用している私の英語」ではない。

「学ぶ英語」と「使う英語」、あるいは「教える英語」と「使う英語」を同一視することは、一種の「カテゴリー錯誤」(Ryle 1949)である。「学ぶ英語」や「教える英語」は〈どこかに在る〉と思われている英語であるのに対して、「使う英語」は使う当事者に帰属する英語のはずだからである。つまり、《my English》は学んだり教えたりする対象ではない。学んだり教えたりする対象は《English》——それが実在するか否かは別として——である。

(田中茂範・深谷昌弘、1998『〈意味づけ論〉の展開』より)